



Title	キリシタン版前期国字版本の仮名用字法について
Author(s)	白井, 純
Citation	国語国文研究, 137, 74(1)-56(19)
Issue Date	2010-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93267
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_137-74-56.pdf



キリシタン版前期国字版本の 仮名用字法について

白 井 純

1. はじめに

本稿はキリシタン版国字本の前期活字本を対象として機能的な仮名用字法を検討したものである。その結果、語頭あるいは非語頭に特定の字母を配置する仮名用字法を多くの仮名に認めたが、その偏りは語種として漢語にもっとも強く現れ、和語がそれに続き、原語では相対的に曖昧であること、最初に印刷されたと推定される「どちりいなきりしたん」よりも後から出版された「ばうちずもの授けやう」により強く現れること、助詞に特別な配慮はみられないこと、仮名「は」周辺の仮名遣と仮名用字法はよく整理されていることを指摘した。

2. 先行研究

1つの仮名に対応する複数の字母が、語頭や助詞などの特定箇所特殊な用字法をすることで仮名文の語境界表示に貢献することがある。このことは小松（1974）¹に主張されており、機能的な仮名用字法²の基本的な考え方となる。この立場から日本側の様々な文献での実態が解明されつつあるが、今野（1996）はキリシタン版「落葉集」を対象として調査を行い、規則的な仮名用字法の存在を指摘している。

鄭（1998）はキリシタン版前期活字本「どちりいなきりしたん」と後期活字本「どちりなきりしたん」の仮名用字法を詳細なデータと共に検討したもので、本稿が直接参考とすべき論考である。本稿の調査結果との比較も可能であるため、本文中にも適宜引用して紹介したい。一方で、調査範囲が基本的には「どちりな」二本のそれぞれ1/5程度に限られ、キリシタン版の仮名用字法の全容解明とは言い難いのは惜しまれる。語種についての配慮も不十分であると思われ、この点については本稿において新しく主張を行いたい。また、教義書として「どちりな」同士を比較しているが、言うまでもなく後期活字本の「どちりなきりしたん」は書写文献ではなく、前期・後期で特徴の異なる金属活字や印刷技法のもとに出版された印刷物であって、本文にこそ共通する要素はあるものの、「どちりな」だけの比較にどのような意味があるのか疑問に思う。まずは、前期活字本として現存する「どちりいなきりしたん」「ばうちずもの授けやう」の仮名用字法を悉皆調査して検討する必要があるだろう。

岸本（2001）は同じく「どちりな」二本を中心に、キリシタン版国字本の本語（原

語)の仮名「え」「ゑ」とその変遷をまとめている。それによれば、当時、同音に対応した仮名「え」「ゑ」はキリシタン版後期活字本において語頭と語中語尾において使い分けられ、仮名遣として語頭に「え」を使用していないこと、そしてこれは当時の日本語側文献の特徴に一致するものだったことを指摘している。

白井(2009)には「さるばとるむんぢ」を中心とする後期活字本の仮名用字法についてまとめているⁱⁱⁱ⁾。語頭・非語頭と助詞を表示する機能的な仮名用字法について検討したもので、本稿と比較することでキリシタン版の仮名用字法についてある程度は明らかにしえたと考えている。なお、本稿に関連して、白井(2005)に前期活字本の全仮名活字の使用回数をまとめているが、前期活字本には明らかな誤植のほか、清音の活字を濁音仮名に使用した例(あるいはその逆)が多いために、数え方の違いにより仮名の使用回数などが本稿とは一致しないことをあらかじめお断りしておく。

3. 調査の対象

キリシタン版国字本は使用された活字の相違によって前期・後期に区別できる。本稿で調査対象とした前期活字本「どちりいなきりしたん」「ばうちずもの授けやう」は、機能的な仮名用字法に関連して以下のような特徴をもつ。

1. いくつかの平仮名に複数の字母がある。
2. 原則として連綿がない。
3. 語種として和語のほかに漢語や原語を含む。

このうち1. は機能的な仮名用字法の前提となる。

2. は前期活字本の最大の特徴であり、連綿を豊富に含む後期活字本との比較が必要だが、この問題については別稿にまとめたい。仮名用字法をみるうえで連綿を無視できないことは白井(2009)に指摘したが^{iv)}、この意味で連綿をもたない前期活字本には、連綿に影響されない仮名用字法が純粋なカタチで現れると期待できる。印刷技術は後期活字本に比べて未熟だったかもしれないが、仮名用字法をみるうえで好都合な文献であるのは間違いない。

本稿で注目したいのは3. であり、原則として和文環境のなかで発達してきた仮名用字法が、平仮名表記される漢語や原語にどのように対応したのかを、語頭や非語頭に使用された字母に注目することで明らかにしたい。

4. 調査の方法

本稿は前期活字本「どちりいなきりしたん」「ばうちずもの授けやう」の仮名用字法を、ごく一部にみられる連綿は除外したうえで調査した。語種を和語、漢語、原語、助詞(語頭のみ)に区別したうえで、それぞれの語頭と非語頭にどの字母が使用されたのかをみてゆく。なお、和語の複合語後部要素の先頭は非語頭として扱い、二字漢

語の後部要素の開始位置は語頭として扱った⁵⁾。また助詞は「が・と・に・の・は・へ・も・よ(り)・を」の語頭に限っている。誤植は除外し、清音の活字を濁音仮名として使用した例(あるいはその逆)もすべて除外した。

仮名用字法をみるうえで留意しておきたいのは、語種によって該当の仮名が現れ得ない場所があることである。たとえば和語であれば原則として語頭の濁音、半濁音、ラ行音などは現れず、漢語の非語頭には音節の構成上、母音、半母音、入声音、撥音に対応した表記がみられるだけである。

たとえば、「どちりいなきりしたん」の仮名「も」であれば表1. のような語が含まれる。

表1. 使用位置と語種別にみた仮名「も」の使用状況

語頭	和語	もちうる, もとづく, もの, ……
	漢語	もんだう, もうとう, だい <u>も</u> く, ……
	原語	<u>も</u> るたる
	助詞	<u>も</u>
非語頭	和語	たの <u>も</u> しく, お <u>も</u> ふ, こ <u>も</u> る, ……
	漢語	(該当なし)
	原語	かてき <u>ずも</u> , め <u>も</u> うりあ, ば <u>う</u> ち <u>ずも</u> , ……

また、仮名によっては1つの仮名が3～4種類の字母をもつ場合がある。ただし3種類以上の字母がすべて仮名用字法に結びつくと思われるものはない。白井(2005)に指摘したように、前期活字本の仮名「か」「へ」などは印刷途中で使用する活字を入れ替えた結果、同じ字母に由来するが微細な違いをもつ別の活字に入れ替わったものであり、これが仮名用字法を意図したものではないのは明らかである。

調査結果を別表1. に示す。表中の「a」「b」は同一字母に由来する形の異なる変体仮名を示す。「※」は機能的な仮名用字法に関係しない変体仮名「a」「b」を一つにまとめ同一字母として扱ったことを示す。たとえば「ばうちずもの授けやう」の仮名「か」には、[加]に2種類、[可]に2種類あるが、[加]の2種間、[可]の2種間には機能的にみて区別が無く、機能的な違いが現れるとすれば[加]と[可]の二字母間に認められるため、まとめて扱っている。一つの仮名に三種類の字母があり、かたがた大きく異なるため二字母にまとめられないものは()で掲載したが、用例数が少なく、一部を除いて仮名用字法には直接関係しない。また、以下では仮名を「」で、字母を[]で囲って区別している。

5. 調査の分析

5.1. 語種と仮名用字法

別表1. に示したように、複数の字母がみられる仮名は少なくない。そうした仮名

を選び出し、語頭（和語・漢語・原語）・非語頭（和語・漢語・原語）と助詞において、それぞれの字母がどれだけの割合で語頭に使用されたのか、その比率の差の大きさを別表2. に示した。

たとえば、「どちりいなきりしたん」の和語の語頭では、仮名「こ」の字母〔己〕102例に対して字母〔古〕4例で、〔己〕が圧倒的に多い。それぞれの比率は、〔己〕が $102/(102+4)=0.962$ 、〔古〕が $4/(102+4)=0.037$ となり、この差は $0.9604-0.0396=0.925$ となる。同様に仮名「か」の字母〔加〕が0.573、字母〔可〕が0.426で差は0.147となる。したがって仮名「こ」の語頭で字母〔己〕が偏って使用されていること、仮名「か」の語頭では使用する字母に偏りがあまりみられないことがわかる。もちろん、こうした仮名用字法には単純に使用する字母の多少が現れることもあるため、偏りのすべてが必ずしも機能的な仮名用字法に結びつくわけではないが、その前提として必要な条件である。また、比率については1.000を示すものが少なくないが、用例数が極端に少ない場合に値が高くなり易い。そこで別表2. では、用例数の合計が10例以上で比率の差が0.8以上ある箇所（おおむね1：9より大きな偏りをもつ箇所）を反転表示してある。

殆どの仮名である程度の偏りを示すが、語種別にみると偏りが最も顕著なのは漢語であり、和語が次ぎ、原語は最も低い。このことは0.8以上になる箇所の数と、平均の値に現れている。原語の仮名用字法は、語頭では用例が少ないため判断が難しいが、「どちりいなきりしたん」の非語頭をみればあまり偏りがなく、二つの字母を均等に用いる傾向にあることが分かるだろう。また、語頭と非語頭に共通して、「どちりいなきりしたん」よりも「ばうちずもの授けやう」で偏りがより強く現れている。

漢語については表2. に示すように使用する字母の偏りが強く、「どちりいなきりしたん」では約8割が、「ばうちずもの授けやう」では9割近くが片方の字母に偏っている^{vi}。

表 2. 漢語内の仮名用字法

		どちらいな		ばうちずも	
		語頭	非語頭	語頭	非語頭
あ	安-阿	15-0		3-0	
お	於 a-於 b	4-0			
か	加※-可※	14-15		13-1	
き	幾 a-幾 b	6-16		6-7	
く	久 a-久 b	27-13	88-4	10-16	27-2
け	介-計	0-17		0-8	
こ	古-己	2-19		21-1	
さ	左-沙	71-6		12-0	
し	志※-之	84-15		38-0	
じ	志-之	42-9		27-1	
す	春-寸	0-2			
そ	曾 a-曾 b	13-1		4-0	
た	太-多	12-23		1-5	
つ	川-徒		45-0		14-0
と	止 a-止 b	1-6		0-2	
な	奈 a-奈 b	4-17		3-0	
に	仁-尔	9-17		3-0	
は	者-八※-波	16-1-0	0-30-0	3-0-0	0-22-0
へ	部※-遍	0-3		1-2	
ま	満※-末	3-11			
み	三-美-(見)	3-0-0			
も	毛 a-毛 b	24-6		6-0	
ら	良 a※-良 b	13-5		15-1	
る	流-累	2-3			
れ	礼-連	0-12		0-1	

漢語は殆どの場合、語頭の仮名用字法だけが問題となるため、こうした傾向は非語頭の仮名用字法に影響されることなくそのまま仮名用字法の特徴として発揮され易い。たとえば「ばうちずもの授けやう」の仮名「し」には漢語語頭に字母〔志〕が 38 例みられるが〔之〕は全く使用されない。

ばうちずも漢語語頭〔志〕：しん（ず）（12），しゆご（す）（3），御しんらう（2），本しやう（2），しあん，しうぢやく，しきたい，しさい，しぜん，しやうげ，しやうばつ，しやべつ，しやめん，しゆくん，しよしう，しよしう，しん實，ぶしあん，御しんく，御しんだい，きしよく，ぎやくしん，きりしたんしゆ，

ばうちずも漢語語頭 [之]：(用例なし)

また両文献ともに漢語非語頭の仮名「つ」(入声音)は字母[川]に統一され^{vii}、仮名「は」の用字法もきわめて明快である。表1.をみれば、これらの傾向は原則として和語や原語にも共通しており、仮名用字法として語種を問わず適用される原則だったことが分かるだろう。

ただし一部の仮名では傾向が曖昧になる。例として「どちりいなきりしたん」の仮名「く」、「ばうちずもの授けやう」の仮名「さ」、二文献共通として仮名「こ」をみておこう。

「どちりいなきりしたん」の仮名「く」における字母の分布は表3.のとおり。

表3. 仮名「く」の字母の分布

	語頭			非語頭		
	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語
久 a	18	27	20	238	88	
久 b	10	13	26	7	4	2

漢語の語頭における仮名用字法は[久 a-久 b]が27-13と曖昧である。

どちりいな漢語語頭 [久 a]：こうくはい (5)、御くはん (3)、くはうだい (3)、だいく (3)、御くはいにん (2)、くらく (2)、御いくはう、くはんたい、くはたい、くんじゅ、くぎやう、くりき、くどく、ざいくわ、けいくはい

どちりいな漢語語頭 [久 b]：こうくはひ (4)、御くはん (2)、さんくはい (2)、くはんねん (2)、くはひにん、御いくはう、ひくはん、

共通する語が多く、用例前後の文脈をみても、何らかの理由で意図的に字母を変えたとは考えにくい。漢語の語頭に位置する字母[久 b]は「どちりいなきりしたん」では後半に多く現れるようにみえるが、他の仮名ではそのような処理はみられないから、これを理由とすることはできない。また変字法や、行頭行末に特殊な字母を用いる仮名用字法が影響したかもしれない^{viii}が、これも、仮名「く」だけが他と異なった傾向を示す理由にはなりそうにない。ここで仮に影響したとするなら、他の仮名にみられる顕著な偏りを説明できなくなるからである。仮名「く」の用字法は、語頭をみる限りは徹底しないが、このことは後で示すように非語頭も含めて考える必要があるため判断を保留しておく。

つぎに「ばうちずもの授けやう」の仮名「さ」を表4.に示す。

表 4. 仮名「き」の字母の分布

	語頭			非語頭		
	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語
左	41	12	11	49		29
沙	19		3	3		2

ききほどの仮名「く」とは違い、漢語の語頭における仮名用字法は字母[左]で間違いない。問題は和語の語頭で、[左]が多いものの[沙]もみられ、この[沙]が非語頭にあまり使用されず、語頭に偏っていることである。一方、[左]は語頭と非語頭であまり差がないから、和語においては[沙]が語頭に位置し易いといえ、漢語と和語で傾向が逆転している。

このことを考えるために、仮名「こ」に注目したい。仮名「こ」は、漢語の語頭で用字法が一致しない。

どちらいな語頭[古]: こんげん, こんぼん

どちらいな語頭[己]: こうくはい (10), いこん (5), こうきう, こうひ, こらい, ほうこう

「どちらいなきりしたん」では語頭は[己]が多い。しかし「ばうちずもの授けやう」では傾向が逆転する。

ばうちずも語頭[古]: こうくハひ (17), いこん (2), こんばう, ほうこう

ばうちずも語頭[己]: せうこ

語頭で字母[古]を使用する傾向は「ばうちずもの授けやう」のすべての語種に共通している。全体の使用数も「どちらいなきりしたん」では[古-己]は35-205であるものが「ばうちずの授けやう」では82-23となっている。つまりよく使用する字母が入れ替わったため、語頭に使用される字母も影響を受けたと考えられ、仮名「こ」には語頭を表示する用字法が存在せず、数量のうえで多く使用される第一字母(常用字母)と、あまり使用されない第二字母(特殊字母)の関係があるということになる。

このように考えるなら、字母の入れ替えはないとしても、ききほど検討した仮名「き」のほか「け」「そ」「へ」などの用字法も同じように第一字母と第二字母の関係にあるため片方の字母が極端に少なくなったもので、語頭の表示はそれほど意識されていないということになるだろう。

語頭の仮名用字法を検討するためには、非語頭を含めた全体数との関係をみる必要がある。言うまでもなく、語頭を表示する仮名用字法が機能するためには、語頭でどちらかの字母に偏るだけでは不十分である。このことは非語頭位置に仮名が自由に現れない漢語では明らかにならないが、そもそも、非語頭位置でも同じ偏りを示すなら語頭を機能的に表示することはできない。つまり語頭における字母の偏りが語頭を表示する仮名用字法によるとみるためには、和語や原語の非語頭における字母の選択をみておく必要がある。

5.2. 字母の使用位置と仮名用字法

ここでは語種を区別したうえで、それぞれの仮名が語頭と非語頭でどのような比率で使用されたのか、その偏り差を表5. に示す。当然ながら、対象は語頭と非語頭の両方に用例があるものに限られる。

表5. 使用位置と字母の偏り差

	どちらいな			ばうちずも		
	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語
あ	0.019		0.140	0.022	1.000	0.153
お				0.993		0.800
か	0.361		0.211	0.885		1.000
き	0.064		0.094	0.191		0.053
く	0.518	0.530	0.071	0.685	0.619	
け	0.039		0.188			
こ	0.107		0.056	0.732		
さ	0.235		0.261	0.408		0.325
し	0.601		0.011	0.438		
じ			0.310			0.167
す	0.156		0.040	0.318		0.052
そ	0.115			0.688		
た	0.450		0.018	0.543		
つ	0.221			0.354		
と	0.426			0.815		
な	0.069		0.051	0.104		
に	0.100					
は	0.755	0.968	0.750	0.550	1.000	
へ	0.985		0.583			
ま	0.092		0.203	0.193		0.033
み	0.035		0.037	0.850		
も	0.199		0.100	0.207		0.185
ら			0.073			
平均	0.277	0.749	0.178	0.499	0.873	0.308

表中では、一つの仮名に対応する2つの字母の双方に用例数10以上があり、かつ字母の偏り差0.5以上の箇所を反転表示した。この箇所は仮名用字法の偏りが顕著であることを示している。

仮名「か」は「どちらいなきりしたん」では和語の語頭での用字法が曖昧であった

が、語頭の「加-可」が74-55であり、非語頭の「加-可」が62-245なので、「加」は語頭に74/(74+62)=0.544, 「可」は語頭に55/(55+245)=0.183となり、0.544-0.183=0.361が差になる。この差が大きいほど機能的な仮名用字法は顕著に現れるとみてよい。つまり仮名「か」は、語頭で「加」、非語頭で「可」を使用する偏りを持ち、それが必要に応じて語頭を明瞭にする機能的な仮名用字法に結びつくということである。この場合は語頭だけでは曖昧なものの、非語頭も含めて考えるなら、仮名「か」の語頭の用字法はある程度の偏りをもつといえるだろう。さらに「ばうちずもの授けやう」では字母「加」は殆ど語頭に限定されており、偏り差も0.885と歴然としている。

ほとんど偏りが無い仮名もあるが、仮名「か」のほかに、「く」「し」「た」「と」「は」などは表6. のような用字法をもつといえる¹⁸。「は」については後ほど詳述する。

表6. 使用位置による字母の偏り差が明らかな仮名とその字母

	和語の仮名用字法の傾向差		語 頭	非語頭
	どちらいな	ばうちずも		
「か」	0.361	0.885	[加※]	[可※]
「く」	0.518	0.685	[久a]	[久b]
「こ」	0.107	0.732	[古]	[己]
「し」	0.601	0.438	[志※]	[之]
「た」	0.450	0.543	[太]	[多]
「と」	0.426	0.815	[止a]	[止b]
「は」	0.755	0.550	[者]	[ハ※]

いずれの仮名も用字法の偏りを示すにとどまり、完全に排他的な用字法になるわけではない。前期活字本における仮名用字法は語頭と非語頭の表示を補助するものであり、絶対的な拘束力をもつわけではないと考えるべきだろう。鄭（1998）では、仮名「あ」「お」「こ」「し」「た」「と」「は」「み」「も」に字母の偏りを認めているが、本稿の調査によれば「あ」「お」「み」「も」には明確な偏りが認めがたく、たまたま調査範囲にそのような偏りが認められたということだろう。「こ」については「ばうちずもの授けやう」に限れば偏りを認めてよい。その他の「し」「た」「と」「は」については本稿でも追認できる。

さきに保留した仮名「く」については、語頭をみる限り偏りは曖昧だが、非語頭で仮名用字法の偏りが強いと、全体として仮名用字法の偏りが認められることになる。

一方で、和語や漢語で仮名用字法が顕著だった仮名「し」の「志」は、表7. のように原語において傾向が曖昧である。

表 7. 原語の語中にみられる仮名「し」の字母

原語	字母	どちらいな	ばうちずも
おらしよ	[志-之]	36-17	0-1
きりしたん		7-47	2-8
(ぜず)きりしと		26-54	2-16
ぼんしよぴらと		4-0	0-0
べにてんしや		2-3	4-1
ぼろしも		0-14	0-0

たとえば「どちらいなきりしたん」の「おらしよ」は[志-之]が36-17,「(ぜず)きりしと」は同じく26-54など、原語の語中には和語では語中に用いられにくい字母[志]が頻繁にみられるように、概して原語の仮名用字法は和語に比べて相対的に不明瞭であることが多い。仮名で表記した原語の語頭を表示することの必要性は漢語に劣ると思われないが、理由は不明であり意外な結果であった。

また、仮名「あ」「き」「な」「ま」は、用例数は十分にあるが偏りが殆ど現れない。したがって機能的な仮名用字法がみられないことを主張できる仮名である。機能的な仮名用字法が強く現れる仮名がある一方で、機能性だけからみれば余剰といえる字母を持つこうした仮名があることは注意すべきだろう。数多く使われる仮名のすべてに複数の字母があるわけではなく、機能性からみて助詞に対応する「の」「を」などは複数の字母を持つのが望ましい仮名であるが、字母は一つしかない。つまり、キリシタン版前期活字本の仮名字母は機能的な仮名用字法だけを意図して調整されているわけではないのである。

以上に述べた内容をまとめておく。

- ・全体的な仮名用字法は両文献に共通する。
- ・仮名用字法の偏りは和語に強く現れ、相対的に原語では弱い。また、数は少ないが漢語に最も強く現れる。
- ・「どちらいなきりしたん」では不明瞭な仮名用字法の偏りが「ばうちずもの授けやう」で明瞭になることが多く、仮名用字法の偏りは「ばうちずもの授けやう」により強く現れる。

これは、語頭のみを比較した際と同じ結果である。つまり漢語の語頭にみられた仮名用字法は、和語や原語の語頭や非語頭を含めた前期国字版本全体の仮名用字法の偏りがより強く現れたものであり、機能的な仮名用字法を牽引する役割を果たしたといえるだろう。

なお、二つ以上の字母をもつ仮名はほとんどが清音の仮名である。逆に言えば濁音の仮名は、対応する清音の仮名に二つの字母があっても一つの字母に統一されており、結果として仮名用字法も機能しない。例外的に仮名「じ」には二つの字母があり、原

語において仮名「し」と同じ偏りをもつが、そもそも濁音が位置する場所は和語においては非語頭に限られ、その位置で濁音活字を使用するから、語頭と非語頭を区別する仮名用字法がなくとも問題は少ないのだろう。また前期活字本は清音活字で濁音仮名を代用することもあるが、仮名用字法によって清濁を区別する意識はみられない。

5.3. 助詞の仮名用字法

助詞「が・と・に・の・は・へ・も・よ（り）・を」の仮名用字法を表8. に示す。

二つ以上の字母をもつ仮名は「と・に・は・へ・も」であるが、「へ」の一つの字母はそもそも僅少であって助詞には使用されず、「は」は音韻/ha/と/wa/に対応するため単純な比較ができない。

表8. 助詞の仮名用字法

仮名	字母	どちらいな	ぼうちずも
が	[加 a]	123	3
と	[止 a-止 b]	46-524	4-165
に	[仁-尔]	99-1153	15-350
の	[乃]	1133	290
は	[者-ハ※-波]	0-651-25	0-173-0
へ	[部※-遍]	18-0	11-0
も	[毛 a-毛 b]	121-122	66-3
よ(り)	[与]	130	31
を	[遠]	951	351

「どちらいなきりしたん」の仮名「も」を除けば、一つの字母にほぼ統一される。ただし、「が」「の」「よ（り）」「を」にはそもそも字母が一つしかない。「どちらいなきりしたん」においては、仮名「も」の字母[毛 b]は助詞に使用されることが多く、仮名「は」の字母[波]は26例中25例が助詞に使用される助詞専用の字体だが、これらの特別な処理は「ぼうちずもの授けやう」では失われる。それ以外の助詞は非語頭に準ずる傾向を示しており、助詞としての用例が多く、しかも語頭にも多数が使用される仮名「の」「を」に一つしか字母を用意しないことからみても、前期活字本には、字母の選択によって助詞を他と区別する意識が希薄である。

- ・前期活字本の仮名用字法では、助詞が非語頭に準じて扱われる。

複数の字母をもつことで、一つの字母を助詞専用に振り向けることもできただろうが、前期活字本ではこのような処理はされない。このことは、後期活字本で助詞の区別に顕著な仮名用字法が認められたことと対照的である^x。

5.4. 仮名「は」の仮名遣と仮名用字法

言うまでもなく仮名「は」は音韻/ha/（音声 [Φa]）と/wa/に対応し、とくに [ハ] がハ行転呼した非語頭の音韻/wa/に対応することは広く認められる仮名用字法である。表9. のように、前期活字本にもこの傾向は認められる。

表9. 仮名「は」の仮名遣と用字法

		語頭			非語頭			助詞
		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	
どちりいな	者	40	16	6	13		2	
	ハ※		1		230	30	4	651
	(波)				1			25
	和	47	2		4		1	
ばうちずも	者	11	3		9			
	ハ※				97	22		173
	(波)	1						
	和	9			1			

語頭に使用された [者] は音韻/ha/に対応する。非語頭では音韻/ha/と/wa/に対応するが、音韻/wa/に対応する [者] は、「どちりいなきりしたん」で10例、「ばうちずもの授けやう」で3例^{x1}のみである。また「はなはだ (fanafada)」に [者] を繰り返して使用しているように、語中の音韻/ha/に対応するのは [ハ] ではなく [者] であることから、[者] は音韻/ha/に対応する傾向をもち（結果として殆どは語頭に分布する）、助詞には全く使用されない。このことは鄭 (1998) でも言及されているが、そこで「(「どちりいなきりしたん」の)〈者〉はハ行転呼音の例として1例もあらわれず」(7頁)としているのは調査範囲を限ったための見落としで、「いはひ(24丁表9行目)」「いつはり(42丁裏3行目)」など、数は少ないが使用された例があることを指摘しておく。

[ハ]は語頭には使用されず、ハ行転呼した非語頭と助詞の音韻/wa/に対応する。語頭の音韻/wa/には [和] が対応する。したがって、仮名「は」と仮名「わ」は仮名遣として区別されており、仮名「は」の内部では [者] と [ハ] が音韻に対応して使い分けられるといえる^{x11}。

- ・仮名「は」周辺の仮名遣と仮名用字法はよく整理されている。

これは後期活字本にもみられる特徴である。助詞やハ行転呼音に関連して読解上の負担がかかる仮名「は」の周辺について、特に配慮することが前期活字本の段階から行われていたことになる。

6. おわりに

前期活字本には多くの仮名に語頭を表示する機能的な仮名用字法が認められる。その特徴は以下のとおりである。

1. 両文献の仮名用字法は類似している。
2. 仮名用字法の偏りは、漢語＞和語＞原語の順に強く現れる。
3. 仮名用字法の偏りは、先行する「どちりいなきりしたん」より後続の「ばうちずもの授けやう」により強く現れる。
4. 助詞に特別な配慮はせず非語頭に準じて扱う。
5. 仮名「は」周辺の仮名遣と仮名用字法はよく整理されている。

1. について、二文献の仮名用字法は類似しており、前期活字本の仮名用字法と同じ方針をもつものだったことがわかる。

2. について、仮名用字法の偏りは漢語に最も強く現れている。この結果、仮名用字法は漢語を平仮名で表記するという変則的な表記の欠点を補って十分に機能したと考えられるが、同様の課題をもつと思われる原語で仮名用字法が機能しないのは意外な結果であった。

3. について、すべての語種に共通して、「どちりいなきりしたん」よりも「ばうちずもの授けやう」に仮名用字法の偏りが強く現れているが、このことは「どちりいなきりしたん」の後で「ばうちずもの授けやう」が出版され、印刷を進める過程で仮名用字法についてより徹底した処理が行われるようになった、つまり仮名用字法の改善がみられたと考えれば納得がいく。

4. について、前期活字本の仮名用字法が、白井（2009）に指摘したような後期活字本の状況とは対照的に助詞に特別な配慮をせず、もっぱら語頭表示に特化されていたことに注意しておきたい。このことはキリシタン版全体の、また日本側文献の仮名用字法を考えるうえで重要な手がかりを与えてくれるだろう。ただし5. のように必要な箇所では統一的な処理を行っており、これは後期活字本に引き継がれている。

参考文献

- 岸本恵実（2001）「キリシタン版国字本の本語表記における「え」「ゑ」の用法」『日本語・日本文化』27, 大阪外国語大学留学生日本語教育センター, pp.71-92
- 小松英雄（1974）「藤原定家の文字づかい——「を」「お」の中和を中心として——」『言語生活』272, 筑摩書房, pp.33-42
- 小松英雄（1998）『日本語書記史原論』笠間書院
- 今野真二（1995）「仮名文字遣からみた『落葉集』——「は」「わ」の場合——」『国文学研究』25, 早稲田大学国文学会, pp.108-119（今野真二（2001）『仮名表記論攷』

清文堂に所収)

- 今野真二 (1996) 『『落葉集』の仮名文字遣について——「か」「た」「に」「へ」「み」に関して——』『国語文字史の研究』3, pp.119-133 (今野真二 (2001) 『仮名表記論攷』清文堂に所収)
- 白井 純 (2005) 「キリシタン版前期国字版本の平仮名活字について」『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』石塚晴通教授退職記念会編, 汲古書院, pp.307-319
- 白井 純 (2009) 「キリシタン版の仮名文字遣」『訓点語と訓点資料』第122輯, 訓点語学会, pp.L1-L16
- 鄭炫赫 (1998) 「キリシタン文献の平仮名の用字法——国字本『どちりなきりしたん』を中心に——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44輯, pp.3-14

注

- ⁱ 小松 (1974) では、藤原定家の仮名文テキストにみられる仮名字体を「基本字体」「補助字体」の2種類に分け、「基本字体」を「特別の制約が加わらない場合に使用される字体」, 「補助字体」を「同一字体の隣接を避けたり、語頭に使用されたり、あるいは、一つの語が行末／行頭に分かれる場合にハイフンと同じ機能で行頭に使用されるなど、視覚的变化を与える目的で使用される字体」(140頁)としている。
- ⁱⁱ 仮名字母の選択にあたっては、書道芸術からみた美術的な効果と、語の切れ続き表示という機能的な効果が問題となるが、ここでは後者を指して機能的な仮名用字法と呼んでいる。
- ⁱⁱⁱ 白井 (2009) では「仮名文字遣」としたが、小松英雄氏のご指摘を受けて本稿では「仮名用字法」と言い換え、両者を同じ意味で用いている。
- ^{iv} 仮名用字法において語頭専用となる字母が連綿活字内に現れ、これが語中に使用された例がある。連綿が自立語の語頭をまたがないという強力な制約のあるキリシタン版においては、連綿の2字目以下に位置することでそこが自立語の語頭でないことを担保できるため、誤読の恐れがないからである。
- ^v 二字漢語は一つの語であるという見方もあるが、後期活字本も含めたキリシタン版の仮名用字法の実態からみて、二字漢語の後部要素の先頭は語頭に準じて扱うものとした。例えば、「ばうちずもの授けやう」の仮名「し」は、[志] が語頭、[之] が非語頭に使用される傾向を持つが、5.1 に示すように「きしよく (気色)」「しよし (諸宗)」「ぎやくしん (逆心)」「本しやう (本性)」など二字漢語の後部要素の先頭ですべて [志] を使用している。これは仮名表記される漢字の先頭を意識的に示したのとして理解できる。但し「どちりいなきりしたん」では「ふしん (不審)」「かしやく (呵責)」に [志] [之] の両方がみられるなど統一されない。サ変動詞の「し」の仮名用字法も統一されないという点で共通しているが、どちらも、通常の語に比べて語頭という意識が弱いのが原因なのかもしれない。
- ^{vi} 表中の「※」「a」「b」の意味については別表1. と同様である (以下同じ)。

- vii 鄭（1998）によれば、後期活字本の「どちりなきりしたん」においては、入声音や促音に専用の字母を使用するという。
- viii 行末で縦方向に狭い場合に、仮名用字法としては語中に使用されにくい仮名「し」の字母〔志〕が使用された例が散見する。行末を揃えるために（あるいは行内に押し込むために）仮名用字法に違反したと思われる。
- ix 「ばうちずもの授けやう」では仮名「し」で仮名用字法が後退しているようにもみえるが、これは数の多い単独サ変動詞を非語頭として扱えばある程度解消される。漢語サ変動詞は今回の調査で非語頭として扱ったが、これに準ずるものだろうか。
- x 後期活字本の仮名用字法については白井（2009）を参照されたい。後期活字本では漢字表記が一般的になり、語頭を仮名用字法によって区別する必要が低下している。前期活字本と比較するなら、仮名用字法のもつ表現力が語頭の表示から助詞の表示に向けられたとみることができるだろう。
- xi この3例はすべて「あはれみ（auaremi）」に使用される。
- xii 語頭に〔八〕を用いた唯一の例外は「どちりなきりしたん」の「にうハ（柔和）」であるが、これは二字漢語後部要素の先頭として本稿では語頭扱いにしたものである。但し、脚注vに示したように、「どちりいなきりしたん」においては漢語後部要素の先頭における語頭意識は他よりも弱く曖昧なようでもあるため、これを非語頭とみて字母〔八〕を使うという処理がなされても不自然ではない。

（しらい じゅん・信州大学専任講師）

別表 1. 字母の使用状況

		どちらいな							ばうちずも						
		語頭			非語頭			助詞	語頭			非語頭			助詞
		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	
あ	阿	44		17	4		51		40	3	13	1		10	
	安	234	15	76	16		119		61	1	7	3	0	10	
い	以	164	20	13	28	145	117		48	4	9	1	44	36	
う	宇	110	2	2	3	211	304		43			12	103	81	
え	衣	3		2	10							4			
お	於 a	149	4	67					135		4	1		1	
	於 b	20		5											
か	加※	74	14	10	62		19		76	13	1	3			
	可※	55	15	12	245		78		12	1		144		2	
が	加	1	10	29	114		6	123		1		28			3
き	幾 a	4	6	13	32		2		1	6	18	147		1	
	幾 b	20	16	123	406		5		16	7	10	65			
ぎ	幾		14		12					7		4			
く	久 a	18	27	20	238	88			7	10	4	100	27		
	久 b	10	13	26	7	4	2		15	16	8	5	2		
ぐ	久		1	1	6					1	5	4			
け	介				5							1			
	計	4	17	12	98		52			8		76		7	
げ	計		15		24		3			3		15			
こ	古	4	2	25	4				28	21	29	4			
	己	102	19	17	66		1		3	1	1	18			
ご	己	52	19		6		30		8	21		1		1	
さ	左	73	71	123	96		100		41	12	11	49		29	
	沙	8	6	65	4		15		19		3	3		2	
ざ	左		8		49		4			1		20			
し	志※	51	84	1	31		86		13	38		16		10	
	之	11	15		510		171		3			296		30	
じ	志		42	9	2		20			27	1	3		5	
	之		9		70		55			1		28		6	
す	春	42		19	90		157		19		6	97		76	
	寸	23	2	16	119		218		13		1	14		7	
ず	春				63		38					46		31	
	寸				107		72					12		8	

		どちらいな							ばうちずも						
		語頭			非語頭			助詞	語頭			非語頭			助詞
		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	
せ	世	13	33	5	84		5		7	18		38		1	
ぜ	世	1	9	94			28			10	22	1		3	
そ	曾 a	116	13	1	15				22	4		10		5	
	曾 b	6	1												
ぞ	曾		5		165		4					8		3	
た	多	50	12		86		85		8	1		31		10	
	太	170	23	1	38		55		89	5		30		12	
だ	多		38	5	62		56			3		21			
ち	千	37	14	1	24		121		7	12		15	3	47	
ぢ	千		18	4	3		5			4		1			
つ	川	29			57	45	31		3			37	14	6	
	徒	48			38		27		21			28		3	
づ	徒		5		73							40			
て	天	1	14	13	630		96			5	3	231		26	
で	天		3	171	19		57			1	39	15		20	
と	止 a	24	1		18		38	46	24			5		3	4
	止 b	29	6		170		257	524	1	2		77		24	165
ど	止		9	12	67		17			1		18		1	
な	奈 a	75	4	3	88		3		101	3		93		7	
	奈 b	134	17	22	209		27		5			3		1	
に	仁	3	9		2		10	99	1	3					15
	尔	5	17		5		59	1153						17	350
ぬ	奴	4			39		2					10			
ね	称	14	10		31		8		2	2		3		1	
の	乃	49		3	39		7	1133	16		2	13		6	290
は	者	40	16	6	13		2		11	3		9			
	ハ※		1		230	30	4	651				97	22		173
	(波)				1			25	1						
ば	者		8	24	171		1			13	25	60			
ひ	比	34	4	42	344		36		14	1	30	113		13	
び	比		4	34	29		7			18	2	9			
ふ	不	11	46		60		10		7	3		14		1	
ぶ	不		13		5					2		9			

		どちりいな							ばうちずも						
		語頭			非語頭			助詞	語頭			非語頭			助詞
		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語		和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	
へ	部※	4		7	262		5	18		1		73			11
	遍	1	3				5			2		1		7	
べ	部		9	50	195		13			4	1	118		1	
ぼ	保	34	1	5	22		1		22	3		6			
ぼ	保		3	1	5		3					7		1	
ま	満※	19	3	17	110		22		15		6	21		7	
	末	67	11	69	213		39		13		3	45		4	
み	三	21	3	15	106		9		2						
	美	2		10	8		7		12			68			
	(見)	1													
む	武	39	3		62		11		4	3		34			
め	女	4	7	5	103		142		5	4		60		5	
も	毛 a	69	24	30	88		30	121	17	6	5	41		22	66
	毛 b	6	6	12	19		18	122	1			1		1	3
や	也	32	31		172	41	100		7	10		34	48	28	
ゆ	由	40	8		34	8	19		9	3		10	5	1	
よ	与	143	10		38	27	118	130	45	5		24	4	18	31
ら	良 a※		13	3	44		38			15		15		7	
	良 b		5		259		164			1		89		6	
り	里		25	5	550		316			13	1	172		79	
る	流		2		78		27					173		32	
	留		3		705		230					66		11	
れ	礼				97		21					18		6	
	連		12		163		95			1		75		20	
ろ	呂				22		32			2		9		2	
わ	和	47	2		4		1		9			1			
ゐ	為	7		3	6				4	2		18			
ゑ	恵	1	13	82	9		11			11	12	4		1	
を	遠	117	1	15	27			951	18			13			351
ん	无				113	235	546					33	83	114	
計		2823	1017	1473	8856	834	4806	5096	1124	403	282	3489	355	936	1462

別表 2. 二つの字母をもつ仮名の語頭・非語頭における使用字母の偏りの差

	語頭						非語頭					
	どちりいな			ばうちずも			どちりいな			ばうちずも		
	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語	和語	漢語	原語
あ	0.683	1.000	0.634	0.208	0.500	0.300	0.600		0.400	0.500		0.000
お	0.763	1.000	0.861	1.000		1.000						
か	0.147	0.034	0.091	0.727	0.857	1.000	0.596		0.608	0.959		1.000
き	0.667	0.455	0.809	0.882	0.077	0.286	0.854		0.429	0.387		1.000
く	0.286	0.350	0.130	0.364	0.231	0.333	0.943	0.913	1.000	0.905	0.862	
け	1.000	1.000	1.000		1.000		0.903		1.000	0.974		1.000
こ	0.925	0.810	0.190	0.806	0.909	0.933	0.886		1.000	0.636		
さ	0.802	0.844	0.309	0.367	1.000	0.571	0.920		0.739	0.885		0.871
し	0.645	0.697	1.000	0.625	1.000		0.885		0.331	0.897		0.500
じ		0.647	1.000		0.929	1.000	0.944		0.467	0.806		0.091
す	0.292	1.000	0.086	0.188		0.714	0.139		0.163	0.748		0.831
ず							0.259		0.309	0.586		0.590
そ	0.902	0.857	1.000	1.000	1.000		1.000			1.000		1.000
た	0.545	0.314	1.000	0.835	0.667		0.387		0.214	0.016		0.091
つ	0.247			0.750			0.200	1.000	0.069	0.138	1.000	0.333
と	0.094	0.714		0.920	1.000		0.809		0.742	0.878		0.778
な	0.282	0.619	0.760	0.906	1.000		0.407		0.800	0.938		0.750
に	0.250	0.308		1.000	1.000		0.429		0.710			1.000
は	1.000	0.882	1.000	1.000	1.000		0.893	1.000	0.333	0.830	1.000	
へ	0.600	1.000	1.000		0.333		1.000		0.000	0.973		1.000
ま	0.558	0.571	0.605	0.071		0.333	0.319		0.279	0.364		0.273
み	0.826	1.000	0.200	0.714			0.860		0.125	1.000		
も	0.840	0.600	0.429	0.889	1.000	1.000	0.645		0.250	0.952		0.913
ら		0.444	1.000		0.875		0.710		0.624	0.712		0.077
る		0.200					0.801		0.790	0.448		0.488
れ		1.000			1.000		0.254		0.638	0.613		0.538
平均	0.588	0.681	0.655	0.697	0.809	0.679	0.666	0.971	0.501	0.714	0.954	0.625